

# 流通科学大学における「文章表現 I」の効果と課題

## The effect and problem of “Expressive writing course I” at University of Marketing and Distribution Science

藤田 里実\*、西川 真理子†、山下 香‡

Satomi Fujita, Mariko Nishikawa, Kaori Yamashita

2016～2018年の本学の「文章表現 I」の授業効果を、アンケート調査の結果から総括する。全体的な傾向として文章を書くことに対する抵抗感が薄れ、自信をつけたことがわかった。また論理的文章の「型」の定着・「他者の視点」の獲得・意見提示への抵抗感低減もみられたことから、初年次教育の一環として、学び続ける主体形成の第一歩を踏み出す効果があったと考えられる。

キーワード：文章表現教育、態度変容、学び続ける主体構築

### I. 本稿の背景・目的・方法

#### 1. 「文章表現 I」の目標と特徴

本学の文章表現教育である「文章表現 I」は、2015年度より初年次教育の一環である「教養基礎科目」として設置された。「文章表現 I」では、目標として、①文章を書くための知識・技術を身につける、②文章を書く上で必要とされる論理的思考力を身につける、③主体的に多様な学生と協働して学ぶ態度を身につける、の3点を掲げている<sup>1)</sup>。これは学校教育法第30条2および「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について（答申）」(2014)<sup>2)</sup>の双方に示された学力観に基づいている。これらの学力観をまとめると、1. 基礎的な知識・技能、2. 思考力・判断力・表現力などの能力、3. 主体性をもって多様な人々と協働して学ぶ態度（主体性・多様性・協働性）となり、「文章表現 I」の目標は「大学教育を通じてはぐくむべき『生きる力』」を構成する「確かな学力」（前出答申より）に対応しているといえよう。

また2016年以降の「文章表現 I」の特徴としては、西川（2018）<sup>3)</sup>に詳細があるが、主などこ

\* 流通科学大学商学部、〒651-2188 神戸市西区学園西町3-1

† 流通科学大学経済学部、〒651-2188 神戸市西区学園西町3-1

‡ 流通科学大学人間社会学部、〒651-2188 神戸市西区学園西町3-1

(2018年12月14日受理)

©2019 Center for Promotion of Higher Education

ろをまとめると、①レポートを書くために必要な知識をできるだけシンプルに（3部構成で書く・主張と根拠＝資料読解の重要性・レポートらしい表現）提示、②レポートを（スモールステップを繰り返すことで）実際に書きあげる、③学生同士でチェックし合い助言し合う、ピア・レスポンスの導入、となる。これらを実際の15回の授業に落とし込んだものが表1である。

(表1)「文章表現I」15回の流れ

授業回	概要	3部構成	執筆	ピア
第1回	レポートを書く目的と効果を理解する			
第2回	レポートの特徴をつかむ	○		
第3回	レポートを書いてみる①	○	○	
第4回	レポートをチェックし合う ーピア・レスポンスー	○	○	○
第5回	レポートを書いてみる②	○	○	
第6回	資料を読む必要性について考える			
第7回	資料を読む力をつける ①キーワードを見つける ②論理関係をつかむ			
第8回	資料を読む力をつける ③論理関係を構造化する			
第9回	資料をまとめる力をつける			○
第10回	資料からテーマに関する情報を得る	○		
第11回	問いを立て、主張を決める	○	○	
第12回	アウトラインを決め、根拠をそろえる	○	○	○
第13回	資料を引用する（根拠を示す）	○	○	
第14回	レポートを書く・推敲する	○	○	
第15回	清書して、提出する	○	○	

## 2. 本稿の目的と方法

本稿ではこれまでの「文章表現I」の効果と課題を総括することを目的とする。「文章表現I」の授業効果に関しては、2016年よりアンケート調査を開始し、2017年・2018年はピア・レスポンスについても調査している。この3か年のアンケート調査結果を用い、本稿では自由記述部分を除いた数値部分の結果分析と考察を行う。

## Ⅱ. アンケート結果より

2016年・2017年・2018年のアンケート結果を(表2)～(表11)に示す。これらから特徴的な3点を挙げていく。

### 1. 3年連続した全体的な傾向

まず、3年連続して見られた全体的な傾向を2つ挙げる。

一つ目は、(表2)に示したような「文章を書くこと」に対する抵抗感の低減である。ただし、「文章を読むこと」に対する抵抗感を受講前後であまり変化は見られなかった(表3)。

二つ目は、(表4)・(表5)に見られる「できる得点」、(表6)・(表7)・(表8)に見られる「心がけ得点」の平均点の向上である。「できる得点」・「心がけ得点」とは、岸・梶井・飯島(2012)<sup>5)</sup>による「文章産出困難感尺度」を援用したもので、学生が感じている文章作成にかかわる難しさの変化を測定するために用いた。この尺度により、学生が文章を産出する際に持つであろう困難感を、「意識」面と「行動・遂行」面で区分して測定することが可能になると考える。本アンケート調査ではこの「意識」面にかかわる質問項目の回答(7件法)を点数として合計し、「心がけ得点」と名付けた。また「行動・遂行」面にかかわる質問項目の回答(7件法)を点数として合計し、「できる得点」と名付けた。「心がけ得点」の向上は、文章作成の際に注意すべき要素を意識したと学生がより強く感じるようになった傾向を、「できる得点」の向上は、注意すべき要素を実行できるとより強く感じるようになった傾向を、それぞれ表していることになる。

### 2. 3年連続して上昇が大きい項目

次に、受講前後で有意な差がある項目のうち、3年連続で特に受講後のポイント上昇が著しいもの<sup>6)</sup>を抽出した。(表4)～(表8)では下線を付した項目である。

(表4)(表5)の「できる得点」については、「アイディア」にかかわる項目においては、該当する項目はなかった。しかし「推敲」にかかわる項目においては「自分の書いた文章をどのように直せばよいかがわかる」「どこで文章を分ければよいか(段落)わかる」「どの部分に注意して読み返せばよいかわかる」の3項目が該当した。

また(表6)(表7)(表8)の「心がけ」得点については、「全体構成」にかかわる項目において「論点を明確にして文章を書く」「文章全体をまとまりのあるものにする」「始めから終わりまで、話の一貫性を保つ」の3項目、「表現選択」にかかわる項目において「必要のない個所や語句を選び削除する」「足りない情報や説明がないか注意して読み返す」「読み手の視点で文章を読み返す」の3項目、「読み手意識」にかかわる項目において「内容をイメージしやすいように書く」「うまく自分の気持ちを文章に表現する」の2項目が該当した。

### 3. 「ピア・レスポンス」にかかわる項目

次に2016年と2017年のアンケート結果から、ピア・レスポンスについて2年連続して現れた著しいポイント上昇項目を抽出する(表9～11)と、「意見開示抵抗感」にかかわる項目である「自

分の文章を人に見られるのは恥ずかしい」のみが該当した。なお、このピア・レスポンスについてのアンケート項目は、富永（2012）<sup>7)</sup>による「大学生のピア・レスポンス指向性」を評価する指標を援用したものである。

### Ⅲ. 考察

#### 1. 3年間の全体的な傾向

Ⅱ—1で示した「書き抵抗感低減」、「心がけ得点・できる得点の上昇」は、Ⅰ—1であげた「文章表現Ⅰ」の目標②「論理的思考力」構築への道筋をつけたことを示す。文章を書くことが「面倒くさい」「難しそうで嫌だ」という感覚を取り除き、良い文章を書くための要点を意識し、実行できるという自信をつけた。これにより今後論理的文章を書くことに対して抵抗がなくなったと考えられる。レポートなど大学の学びの中で要求される文章作成においても、論理性が担保されることが期待できる。論理的文章を書く頻度が上がれば、論理的思考の方法論も定着することが期待される。

#### 2. 「型」の効果と「他者の視点」の獲得

Ⅱ—2で示した上昇の大きい項目からは、受講学生のA.推敲能力への自信、B.文章全体を俯瞰する能力への自信、C.文章構成上必要な内容の理解、D.読み手存在の意識、の4点の向上が指摘できる。

BとCは、Ⅰ—1目標①の「文章を書くための知識・技能」が定着した結果によるものだろう。定着の方法として「3部構成」という「型」のを繰り返し意識させたことが奏功したと考えられる。論理的文章の構成は様々あるが、「文章表現Ⅰ」では3部構成のみに絞り、その徹底を図った。3部構成に触れた受講回は、(表1)に示すように第2～5・10～15回におよぶ。これにより受講学生は、論理的文章において必要な内容と展開の仕方を理解し、内容上の必要／不必要の判断力、文章全体を俯瞰する思考力（Ⅰ—1目標②）まで身につけ得たことを示すといえよう。

そしてAとDは、Ⅰ—1目標③における「主体性」「多様性」にかかわる。

まずAの推敲能力に関してだが、推敲およびそれに類すること（執筆）を行った受講回は第3～5・11～14回（表1）であり、自分が書いた文章をある一定の基準をもって読み返し、より適切なものとするという作業を繰り返し行わせている。この繰り返しおよび前述の知識定着と相まって、推敲能力への自信がついたものと推察される。「自分は推敲ができる」という自信は、「自分でレポートを最後まで書きあげられる」という自信につながり、今後も主体的に学び、アウトプットを創出していける可能性がみられる。

またDの「読み手存在の意識」については、ピア・レスポンス等で書き手のみならず、読み手の立場に繰り返し立ったことが影響した可能性がある。ピア・レスポンスあるいはそれに類することを行った受講回は第4・9・12・14回である。さらに、推敲とも関連があるだろう。推敲と

は、自分が産出した文章を、読み手という新たな視点を自分の中に獲得した上で読み返すことだといえ、独りよがりではない、読み手に伝わる文章を意識できるようになった、読み手の視点を獲得し得たともいえよう。推敲とピア・レスポンスを通じて、多様な視点を身につけることを体験できたといえる。

### 3. 「ピア」がもたらした可能性

Ⅱ—3 で示した「自分の文章を人に見られるのは恥ずかしい」項目の2年連続した大幅減少から、「意見を提示することの抵抗感が減少した」ことが読める。このことはⅠ—1 目標③における「協働性」の構築にかかわると考えられる。自ら積極的に意見を提示することは、協働的な学びの中で必須の条件である。相互の意見提示をもって成立する協働的な学びの有効性は、「文章表現Ⅰ」の講義内ではより良い文章という目に見える成果として現れる。繰り返しピアを行うことでその有効性に気づいた学生が多くいたことを示していよう。

## IV. まとめ

最後に、これまでに挙げた「文章表現Ⅰ」の効果をまとめる。

「文章表現Ⅰ」では前述の通り、①文章を書くための知識・技術を身につける、②文章を書く上で必要とされる論理的思考力を身につける、③主体的に多様な学生と協働して学ぶ態度を身につける、の3点を目標としてあげたが、全体的には「文章産出抵抗感の低減」「できる得点・心がけ得点の上昇」＝文章産出の際に困難を感じる意識面・行動遂行面、両面における困難感の低減（自信の創出）という効果がまず挙げられる。これにより、論理的文章の産出を繰り返すことをためらわなくなったことにとって、②の「思考力」まで構築される素地をつくったと考えられる。

また「3部構成」という「型」の強調による①「知識」の定着と、②「思考力」・判断力の獲得がみられた。さらに、推敲あるいはそれに類する活動を繰り返し行ったことで、③の「主体性」や「多様性」の理解につながる「他者の視点の獲得」も示唆された。ピア・レスポンスからは、③の「協働性」の獲得の可能性がみられた。

以上より、本学における「文章表現Ⅰ」の授業は、一般的な文章表現教育における知識・技術はもちろん、それにとどまらない思考力・態度のレベルまで至る効果があると言え、学び続ける主体構築の第一歩と位置付け得ると考える。

今後の課題としては、残されたアンケートデータである自由記述、およびインタビューなど質的なデータより、さらに学生の変容の内実とその要因を探っていきたい。

(表2) 文章を書くことに対する抵抗感に関するアンケート調査結果

	2016年(n=213) <sup>8)</sup>			2017年(n=172)			2018年(n=150)		
	受講前	受講後	差	受講前	受講後	差	受講前	受講後	差
エッセイ	2.263	2.455	0.192**	2.0523	2.1976	有意差なし	2.267	2.293	有意差なし
小説	2.268	2.549	0.281**	1.8546	2.1686	0.314**	1.900	2.320	0.42**
資料 <sup>※1</sup>	2.108	2.404	0.296**	1.9011	2.1860	0.2849**	1.993	2.273	0.28**
レポート <sup>※2</sup>	1.967	2.305	0.338**	2.0290	2.5232	0.4942**	2.147	2.520	0.373**

各ジャンルの文章についてそれぞれ、「書くことに抵抗があるか」を「1. 非常にある 2. 少しある 3. あまりない 4. 全くない」の4件法で聞いた。

\*\*=対応のあるt検定において1%有意、\*=5%有意

※1=2016年のアンケート調査では「評論文」と記載した。

※2=2016年のアンケート調査では「論文」と記載した。

(表3) 文章を読むことに対する抵抗感に関するアンケート調査結果

	2016年(n=213)			2017年(n=172)			2018年(n=150)		
	受講前	受講後	差	受講前	受講後	差	受講前	受講後	差
エッセイ	2.944	3.042	有意差なし	2.942	2.9127	有意差なし	3.027	2.967	有意差なし
小説	3.127	3.131	有意差なし	3.017	3.0872	有意差なし	3.107	3.073	有意差なし
資料 <sup>※1</sup>	2.761	2.789	有意差なし	2.541	2.7383	0.198*	2.640	2.793	0.153*
レポート <sup>※2</sup>	2.479	2.718	0.239*	2.779	2.9360	有意差なし	2.927	2.880	有意差なし

各ジャンルの文章についてそれぞれ、「読むことに抵抗があるか」を「1. 非常にある 2. 少しある 3. あまりない 4. 全くない」の4件法で聞いた。

\*\*=対応のあるt検定において1%有意、\*=5%有意

※1=2016年のアンケート調査では「評論文」と記載した。

※2=2016年のアンケート調査では「論文」と記載した。

(表4) 自分はできるという自覚に関するアンケート調査結果

できる得点—アイデアにかかわる項目 (\*\*=対応のある t 検定において 1%有意、\*=5%有意)

	2016年(n=213)			2017年(n=172)			2018年(n=150)		
	受講前	受講後	差	受講前	受講後	差	受講前	受講後	差
次から次へと書く ことを思いつく	3.967	4.254	0.287**	3.279	4.023	0.744**	3.360	3.633	0.273*
文章の書き出しを すぐに思いつく	3.873	4.357	0.484**	3.209	3.849	0.64**	3.100	3.520	0.42**
どのようなことを 書くかすぐに決め ることができる	3.657	4.268	0.611**	3.238	3.709	0.471**	3.333	3.667	0.334*
自分の考えを表す ことばをすぐに思 いつく	3.690	4.286	0.596**	3.302	3.965	0.663**	3.320	3.667	0.347**
書く内容が少ない 時も、ふくらませ ることができる	3.737	4.291	0.554**	3.256	3.843	0.587**	3.247	3.800	0.553**
大事なことを書く 場合、すぐ具体例 が思いつく	3.577	4.089	0.512**	3.193	3.865	0.672**	3.413	3.853	0.44**
できる得点—アイ ディア全体	22.50	25.55	3.043**	19.41	23.23	3.762**	19.77	22.1**	2.367

「文章を書く際、あなたは以下のようなことはわかる、できる、得意である、と言えますか?」とし、「1. 非常に苦手である 2. かなり苦手である 3. 少し苦手である 4. どちらともいえない 5. 少し得意である 6. かなり得意である 7. 非常に得意である」の7件法で選択させた。

(表5) 自分はできるという自覚に関するアンケート調査結果

できる得点—推敲にかかわる項目 (\*\*=対応のあるt検定において1%有意、\*=5%有意)

	2016年(n=213)			2017年(n=172)			2018年(n=150)		
	受講前	受講後	差	受講前	受講後	差	受講前	受講後	差
読み返したとき、 書いた文章のどの 部分を直せばよい かわかる	3.582	4.146	0.564**	3.459	3.865	0.406**	3.38	3.927	0.547**
書きたかったこと が適切なことばで 表現されているか どうかわかる	3.667	4.221	0.554**	3.474	3.959	0.485**	3.547	3.933	0.386**
<u>自分の書いた文章</u> <u>をどのように直せ</u> <u>ばよいか</u> がわかる	<u>3.484</u>	<u>4.15</u>	<u>0.666**</u>	<u>3.07</u>	<u>3.988</u>	<u>0.918**</u>	<u>3.193</u>	<u>3.933</u>	<u>0.74**</u>
読み返したとき、 自分が書きたかつ たことが書けてい るかどうかわかる	4.146	4.498	0.352**	3.721	4.215	0.494**	3.84	4.253	0.413**
<u>どこで文章を分け</u> <u>ればよいか(段落)</u> <u>わかる</u>	<u>3.906</u>	<u>4.667</u>	<u>0.761**</u>	<u>3.573</u>	<u>4.374</u>	<u>0.801**</u>	<u>3.587</u>	<u>4.2</u>	<u>0.613**</u>
<u>どの部分に注意し</u> <u>て読み返せばよい</u> <u>かわかる</u>	<u>3.736</u>	<u>4.33</u>	<u>0.594**</u>	<u>3.203</u>	<u>3.948</u>	<u>0.745**</u>	<u>3.313</u>	<u>3.967</u>	<u>0.654**</u>
できる得点—推敲 全体	22.502	26.005	3.503**	20.4825	24.2906	3.808**	20.86	24.213	3.353**

「文章を書く際、あなたは以下のようなことはわかる、できる、得意である、と言えますか?」とし、「1. 非常に苦手である 2. かなり苦手である 3. 少し苦手である 4. どちらともいえない 5. 少し得意である 6. かなり得意である 7. 非常に得意である」の7件法で選択させた。



(表 6) 自分は注意しているという自覚に関するアンケート調査結果

心がけ得点—全体構成にかかわる項目 (\*\*=対応のある t 検定において 1%有意、\*=5%有意)

	2016年(n=213)			2017年(n=172)			2018年(n=150)		
	受講前	受講後	差	受講前	受講後	差	受講前	受講後	差
論点を明確にして文章を書く	4.394	5.291	0.897**	4.173	4.792	0.619**	4.540	5.107	0.567**
文章全体をまとまりのあるものにする	4.700	5.399	0.699**	4.269	4.994	0.725**	4.507	5.173	0.666**
伝えたいことを読み手にわかってもらえるように書く	4.915	5.488	0.573**	4.657	4.988	有意差なし	4.947	5.287	0.34**
読み手に対して内容を正しく伝える	4.962	5.357	0.395**	4.468	4.994	0.526**	4.913	5.233	0.32**
始めから終わりまで、話の一貫性を保つ	4.269	5.208	0.939**	3.913	4.866	0.953**	4.293	4.993	0.7**
心がけ得点—全体構成	23.239	26.742	3.503**	21.442	24.523	3.081**	23.200	25.793	2.593

「文章を書く際、あなたは以下のようなことを実行しようと心がけていますか?」とし、「1. まったくあてはまらない 2. かなりあてはまらない 3. あまりあてはまらない 4. どちらともいえない 5. 少しあてはまる 6. かなりあてはまる 7. 非常にあてはまる」の7件法で選択させた。

(表 7) 自分は注意しているという自覚に関するアンケート調査結果

心がけ得点—表現選択にかかわる項目 (\*\*=対応のある t 検定において 1%有意、\*=5%有意)

	2016年(n=213)			2017年(n=172)			2018年(n=150)		
	受講前	受講後	差	受講前	受講後	差	受講前	受講後	差
誤字・脱字を見つける	4.958	5.321	0.363**	4.690	5.029	有意差 なし	5.160	4.947	有意差 なし
文字表現が統一されているか、注意して読み返す	4.380	5.192	0.812**	4.250	4.808	0.558**	4.453	4.767	0.314*
必要のない箇所や語句を選び削除する	<u>4.136</u>	<u>5.042</u>	<u>0.906**</u>	<u>3.719</u>	<u>4.702</u>	<u>0.983**</u>	<u>4.140</u>	<u>4.673</u>	<u>0.533**</u>
足りない情報や説明がないか注意して読み返す	<u>4.263</u>	<u>4.981</u>	<u>0.718**</u>	<u>3.800</u>	<u>4.559</u>	<u>0.759**</u>	<u>4.027</u>	<u>4.647</u>	<u>0.62**</u>
文と文のつながりに気をつけながら書く	4.775	5.324	0.549**	4.640	5.058	0.418**	4.807	5.093	0.286*
主語と述語のつながりに気をつけながら書く	4.446	5.155	0.709**	3.913	4.820	0.907**	4.300	4.780	0.48**
読み手の視点で文章を読み返す	<u>4.150</u>	<u>4.939</u>	<u>0.789**</u>	<u>3.587</u>	<u>4.436</u>	<u>0.849**</u>	<u>3.847</u>	<u>4.540</u>	<u>0.693**</u>
同じことばを何回も使わないようにする	4.394	4.934	0.54**	3.977	4.622	0.645**	4.353	4.660	0.307*
心がけ得点—表現選択	35.507	40.864	5.357**	32.512	38.163	5.651**	35.087	38.107	3.02**

「文章を書く際、あなたは以下のようなことを実行しようと考えていますか？」とし、「1. まったくあてはまらない 2. かなりあてはまらない 3. あまりあてはまらない 4. どちらともいえない 5. 少しあてはまる 6. かなりあてはまる 7. 非常にあてはまる」の7件法で選択させた。

(表 8) 自分は注意しているという自覚に関するアンケート調査結果

心がけ得点—読み手意識にかかわる項目 (\*\*=対応のある t 検定において 1%有意、\*=5%有意)

	2016 年			2017 年			2018 年		
	受講前	受講後	差	受講前	受講後	差	受講前	受講後	差
わかりやすい ことばを使っ て表現する	4.831	5.286	0.455**	4.480	4.836	0.356**	4.733	4.713	有意差 なし
<u>内容をイメー ジしやすいよ うに書く</u>	<u>4.451</u>	<u>5.108</u>	<u>0.657**</u>	<u>4.041</u>	<u>4.686</u>	<u>0.645**</u>	<u>4.187</u>	<u>4.640</u>	<u>0.453**</u>
難しいことを やさしく伝え る	4.197	4.972	0.775**	3.836	4.211	0.375**	4.000	4.433	0.433**
読み手が内容 に興味を持っ てくれるよう に書く	4.300	4.930	0.63**	3.598	4.355	0.757**	4.020	4.380	0.36*
自分なりの表 現で文章を書 く	5.155	5.479	0.324**	4.640	4.994	0.354**	4.673	4.920	有意差 なし
<u>うまく自分の 気持ちを文章 に表現する</u>	<u>4.451</u>	<u>5.080</u>	<u>0.629**</u>	<u>4.099</u>	<u>4.663</u>	<u>0.564**</u>	<u>4.107</u>	<u>4.707</u>	<u>0.6**</u>
心がけ得点— 読み手意識	27.385	30.854	3.469**	24.669	27.645	2.977**	25.720	27.793	2.073**

「文章を書く際、あなたは以下のようなことを実行しようと考えていますか？」とし、「1. まったくあてはまらない 2. かなりあてはまらない 3. あまりあてはまらない 4. どちらともいえない 5. 少しあてはまる 6. かなりあてはまる 7. 非常にあてはまる」の 7 件法で選択させた。

(表 9) ピア・レスポンスに関するアンケート調査結果

「ピア親和性」にかかわる項目（数値上昇＝好転を示す）

(\*\*=対応のある t 検定において 1%有意、\*=5%有意)

	2017 年			2018 年		
	受講前	受講後	差	受講前	受講後	差
「ピア」で話し合うのは楽しそう	2.8284	3.5562	0.7278**	3.193	3.527	0.334**
「ピア」でいろいろな人に出会えるのが嬉しい	3.2616	3.5290	0.2674*	3.400	3.400	有意差なし
「ピア」をやると、文章作成能力が向上すると思う	3.7906	4.1744	0.3838**	3.887	4.127	0.24*
自分の文章について、「ピア」のメンバーからいろいろな意見をもらえるのは嬉しい	3.3197	4.3430	1.0233**	3.540	3.867	0.327**
自分の文章をメンバーに見てもらふことにより、文章力を向上させたい	3.5672	4.1461	0.5789**	3.727	3.900	有意差なし
自分の文章について、メンバーからいろいろな意見をもたえられるのは役に立つ	3.8604	4.3372	0.4768**	3.953	4.100	有意差なし
「ピア」で自分の意見を述べることは有意義だと思う	3.3953	3.9534	0.5581**	3.413	3.773	0.36**
ピア親和性	24.0058	27.9651	3.9593**	25.113	26.693	1.58**

「『ピア』での学びについて、次の項目についてあてはまるものを一つ選んでください。」とし、「1. まったくあてはまらない 2. あまりあてはまらない 3. どちらともいえない 4. ややあてはまる 5. とてもあてはまる」の 5 件法で選択させた。

(表 10) ピア・レスポんに関するアンケート調査結果

「意見開示抵抗感」にかかわる項目（数値下降＝好転、ただし☆のみ数値上昇＝好転を示す）

	2017年			2018年		
	受講前	受講後	差	受講前	受講後	差
自分の考えを話すことが苦手である	4.0411	3.5058	-0.5353**	3.847	3.393	-0.454**
ほかのメンバーの文章について意見を述べるのは苦手である	3.9476	3.4651	-0.4825**	3.727	3.333	-0.394**
☆反対意見は、はっきりと述べるようにしている	2.9239	3.3742	0.4503**	2.780	3.407	0.627**
<b>自分の文章を人に見られるのは恥ずかしい</b>	<b>4.1228</b>	<b>3.2339</b>	<b>-0.8889**</b>	<b>3.827</b>	<b>3.113</b>	<b>-0.714**</b>
意見開示抵抗感	14.9883	13.5523	-1.436**	14.180	13.247	-0.933**

『ピア』での学びについて、次の項目についてあてはまるものを一つ選んでください。」とし、「1. まったくあてはまらない 2. あまりあてはまらない 3. どちらともいえない 4. ややあてはまる 5. とてもあてはまる」の5件法で選択させた。（\*\*=対応のあるt検定において1%有意、\*=5%有意）

(表 11) ピア・レスポんに関するアンケート調査結果

「意見受入不愉快感」にかかわる項目（数値下降＝好転を示す）

	2017年			2018年		
	受講前	受講後	差	受講前	受講後	差
自分の文章の問題点をメンバーに指摘されると、不愉快になる	2.6058	2.2294	-0.3764**	2.253	2.327	有意差なし
自分の意見に反論されると、不愉快になる	2.5497	2.2339	-0.3158**	2.247	2.260	有意差なし
文章力が自分と同程度、または自分より低い人からのコメントは役に立たない	2.4035	2.3157	有意差なし	2.193	2.340	有意差なし
メンバーの中に能力の低い人がいると、イライラする	2.0387	2.1096	有意差なし	1.893	2.160	0.267*
意見受入不愉快感	9.4244	8.7790	-0.6454**	8.587	9.087	有意差なし

「『ピア』での学びについて、次の項目についてあてはまるものを一つ選んでください。」とし、「1. まったくあてはまらない 2. あまりあてはまらない 3. どちらともいえない 4. ややあてはまる 5. とてもあてはまる」の5件法で選択させた。（\*\*=対応のある t 検定において 1%有意、\*=5%有意）

#### 引用文献、注

- 1) 西川真理子、藤田里実、山下香「初年次教育で文章表現教育をする意味—流通科学大学「文章表現 I」の試み—」流通科学大学高等教育推進センター紀要第 3 号、pp. 93-106、2018
- 2) 文部科学省「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について（答申）（中教審第 177 号）」  
[www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2015/01/14/1354191.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2015/01/14/1354191.pdf)  
(2018 年 12 月 14 日参照)
- 3) 1) に同じ。
- 4) 西川真理子・橋本信子・山下香・石黒太・藤田里実『アカデミック・ライティングの基礎—資料を活用して論理的な文章を書く』晃洋書房、2017 年を教科書として指定した。なおこの本は、2015・2016 年度の「文章表現 I・II」の講義内容とその振り返りを基にまとめたものである。
- 5) 岸学、梶井芳明、飯島里美：「文章産出困難感尺度の作成とその妥当性の検討」、『東京学芸大学紀要 総合教育科学系 1』63(1)(2012), pp. 159-169
- 6) どれを「著しい」と判断するか基準としては、単年度ごとに上位 1～3 番に当たる項目を抽出し、3 年とも抽出された項目を挙げている。
- 7) 富永敦子「文章表現授業における大学生のピア・レスポンス指向性の変化と要因の分析」日本教育工学会論文誌、36 (3), pp. 301-311, 2012
- 8) 2016 年の n (サンプル数) が既出論文(藤田里実・山下香・西川真理子・石黒太「アクティブラーニングを用いた文章表現教育の効果—文章作成と文章への接触に対する抵抗感の変化に着目して—」流通科学大学高等教育推進センター紀要第 2 号、pp. 37-48、2017 年) とは異なる理由は、既出論文ではすべてのアンケートデータを用いたが、今回は 3 年間の比較を行うため、受講前アンケート・受講後アンケートのどちらも答えているサンプルのみを抽出して取り扱ったことによる。そのため、分析に用いる数値も変化している。